

江戸時代後期・明治時代の色見本帳に関する分析的研究

A study of Color Sample Books from the Late Edo to Meiji Periods

丸塚 花奈子

Kanako MARUZUKA

緒言. 本研究の背景と目的

江戸時代の呉服注文において重要な役割を担っていたものに小袖雛形本がある。小袖雛形本は17世紀半ばに刊行がはじまり、主に町人女性たちが買い求めて自宅で眺めて楽しむファッション誌という側面と、呉服屋が客に貸与して、呉服注文の際に地色や模様、技法などを選ぶ手掛かりとするスタイルブックという側面があった。

小袖雛形本は、おもに小袖全体を図示した雛形図の左右に、地色・模様・技法に関する記述が見られる点に特徴がある。図の上や右に通し番号が付されたものが多く、客は好きな模様を選び、図柄や地色・技法を自分好みに変えたりしながら注文したと考えられている¹。その後、町人女性の小袖の流行が裾模様や袂模様へと変化したこと、使用される加飾技法に限られるものになったことなどを背景にして、先の特徴をもつ小袖雛形本は必ずしも必要とされなくなった。さらに江戸時代中期以降、型染の小紋や縞が盛んに小袖に用いられるようになったことも加わって、小袖雛形本は19世紀前半には刊行されなくなった。

この小袖雛形本の消滅と前後して見られるようになるのが、袂模様や裾模様を肉筆で描いた肉筆模様雛形本である²。肉筆模様雛形本には、小袖雛形本とは異なり、地色や模様、技法に関する記述は見られない。また模様には一部彩色が加えられる場合がある。この肉筆模様雛形本にも多くの場合、模様に番号が振られており、

小袖雛形本同様に注文の際に用いられたとされる。肉筆模様雛形本は明治時代以降も制作されており、色刷のきもの雛形本の刊行が始まるころまで行われたと考えられている。

肉筆模様雛形本には地色や加飾技法について記述がないが、代わりにその役目を担っていたとされるのが地色や型染模様の実物製を収録した見本帳である。これらには様々あり、(A) 染色された色票が貼付され、おもに地色を選ぶ際に使用されたと考えられる色見本帳、(B) 小紋の模様見本を貼付した型染見本帳、(C) 縮緬など実際にきものに用いられる生地、実際の加飾技法で原寸大の模様を表わし貼り込んだ染物見本帳³などがある。

今回、(A) の色見本帳を多数調査する機会を得た。これらは1冊を除き制作年代が明らかでないが、肉筆模様雛形本が制作、使用されていたのと同時期のものだと考えられる。この期間は、西洋から新技術が日本国内に流入してきたことで染織業界にも混乱が生じていた時期でもある。近年、服装史および染織史の分野においてこの時期を含む近代に関する研究が盛んになりつつあるが、文献資料や写真資料を用いた研究が先行しており、現存実物資料を用いた研究はあまり行われていない。そこで本研究では、色見本帳という実物資料を調査することで当時の染織業界の実態の一端を明らかにしていきたい。

1. 先行研究にみる色見本帳の特徴

調査に入る前に、先行研究から色見本帳の特

徴を確認した。色見本帳を詳細に調査した先行研究に上原の論考がある⁴。上原は色見本帳5冊(いずれも個人蔵)について調査を行い、その特徴や成立時期などについて検討している。調査した5冊のうち、形状や構成が類似している4冊に共通する特徴は次の通りである。

- (ア) 和紙横長本の和綴(横24×縦18cm)で本紙部分が13丁の袋綴である。
- (イ) 第1丁表から平絹(第1番のみ縮緬)の染色見本(横6.8×縦5.4cm)を1面に4枚ずつ貼り付け、上下に1番、2番と番号を振っている。
- (ウ) 染色見本裂は薄紙で裏打ちし、縦横を正しくととのえ、周囲に5、6mm幅の黒枠をまわしている。
- (エ) 黒枠の上辺には横長の渋紙が貼られ通し番号が木印で押され、黒枠の右肩には縦長の渋紙が貼られ色彩名が墨書されている。
- (オ) 染色見本裂は第1番から始まり第100番で終わる。
- (カ) 最終丁の裏は白紙で、多くの場合で所蔵印が押され、制作者または所有者の住所、屋号、名前が墨書される。
- (キ) 色彩名が記されている3冊は、いずれも第1番「緋色(縮緬)」、第9番「紅梅色」、第41番「とき色」、第95番「鉄納戸」であり、番号と色彩名が共通している。

また、色彩名の半数以上が茶・鼠・納戸系統色に分類されるが、上原はこれを江戸時代の相次ぐ美服禁止令に対するものだと指摘し、これら5冊の色見本帳の制作年代を江戸時代文化文政期(1804-1830)から嘉永期(1848-1854)と推論している。

さらに、色見本帳を呉服商が顧客に対して示し、顧客がその中から好みの色を選ぶ、そして呉服商が客から受けた注文を染色業者に正確に

伝えるために制作されたものとし、このような色見本帳の性格から、色見本の上辺に付された通し番号は染色業者間で用いられ、色彩名は顧客に対する商売上の理由から呉服商が書き入れたものだと指摘する。

なお、色彩名が書かれていない1冊については、明るい色彩が他の3冊より比較的多いこと、縮緬や紋織、変わり織の染色見本が多いことから、明治期にかかる可能性を示唆している。

2. 本研究で取り扱う資料

事前調査として、江戸時代後期から明治時代にかけて制作されたと考えられる色見本帳14冊を概観した(すべて個人蔵)。その結果、これらの色見本帳のうち2冊は色彩名の記載がなく、また退色や劣化が著しい資料が複数あることが判明した。本論では色彩名の記載のある12冊を取り上げることとし、①形式および構成上の特徴を捉え、②染色見本に書かれた色彩名から系統色別割合を算出し、色彩の傾向を把握する、③化学染料の使用の有無および①と②の結果から制作年代を推定することを試みた。またその結果を踏まえ、色見本帳が制作された背景とその役割について考察した。

3. 形状上の特徴

調査した色見本帳の形態および構成上の特徴を表1に示す。寸法は図1の通りに計測した。本論で取り上げる12冊のうち、色見本帳E(名称なし)、G(名称なし)、H『西京染色本集全』、I(名称なし)、J『梅印』、K『□印』、L『飛印全』、N『京染色手本』の7冊が上原の指摘する特徴を概ね有している(図2)。

主な類似点は、(ア)和紙横長本の和綴(寸法ほぼ同じ)で本紙が13丁の袋綴であること、(イ)第1丁の表から平絹の染色見本を1面に4枚ずつ同寸法で貼り付け、上下に番号を振っていること、(ウ)染色見本裂の周囲に5、6mm幅の黒枠をまわしていること、(エ)黒枠の上辺に横長の渋紙を貼り、通し番号を木印

江戸時代後期・明治時代の色見本帳に関する分析的研究

表1. 事前調査した色見本帳一覧

符号	名称	表紙	寸法(横×縦)cm	丁数	染色見本の寸法 (横×縦)cm	色数	黒枠巾 cm	墨書および所蔵印	備考
A	『□印』	更紗裂	21.7×15.8	10	3.9×4.8	96	-	「京都/油小路榎木町南入/呉服太物/ 并染物悉皆/福田與兵衛」木印	
B	名称なし	型押紙	20.9×15.1	12	6.1×4.8	101	0.6	「上田屋長兵衛」墨書	
C	『菊印』	渋紙	24.8×17.0	10	6.9×4.3	64	0.6	「ごふく染もの所/京都/いづゝや」朱印	
D	名称なし	型押紙	24.0×18.0	19	5.6×3.8	146	0.5	-	色彩名なし
E	名称なし	型押紙	24.0×17.9	13	5.5×4.1	100	0.6	-	
F	『御染色見本』	型染裂	20.2×14.2	-	6.3×4.5	100	-	-	蛇腹折15山 色彩名なし
G	名称なし	型押紙	23.7×17.9	13	5.5×3.9	100	0.5	墨書あり（解読不能）	
H	『西京染色本集 全』	型押紙	24.6×18.7	13	5.6×4.2	100	0.5	「東京橋町二丁目/大黒屋彦平/持用」, 「大彦之印」朱印	
I	名称なし	型押紙	23.0×17.1	13	5.2×4.0	100	0.6	「信州/南安曇/西蔦屋/中曾根」木印, 「維持明治十斉九歳/次丙戌/第一月擇 染」墨書	
J	『梅印』	平織裂	24.4×17.5	13	5.6×4.0	100	0.5	「正札/□□□□シ/呉□□□□/□□ □田□□□□/柏屋□兵衛」木印	
K	『□印』	型押紙	23.6×17.4	13	5.8×4.0	100	0.6	「信州/上田紺屋町/御染物所/本木屋 喜七」木印, 「信州/小喜/上田」朱印	口上あり
L	『飛印 全』	型押紙	22.8×15.5	13	5.7×4.2	100	0.6	「飛印/□□屋/□寿/取持」墨書, 「京 都/屋町通□□□ル/呉服 御染物所/ □□屋□兵衛」木印の上に別の木印が ^s 押される。奥付部分「色本帳ハ少々変 色ニ御座候」, 「萬染物/岡松店/染詠 方/悉皆所」墨書	口上あり
M	『□印』	和紙	21.1×30.3	15	5.7×9.3	118	0.6	「柳馬場御池下ル町/大澤善七」墨書	口上あり
N	『京染色手本』	和紙	23.5×17.5	13	5.4×3.8	100	0.6	朱印あり（解読不能）	

※解読不能部分は□で示す。

※網掛けで示したD,Fは本研究では取り上げない

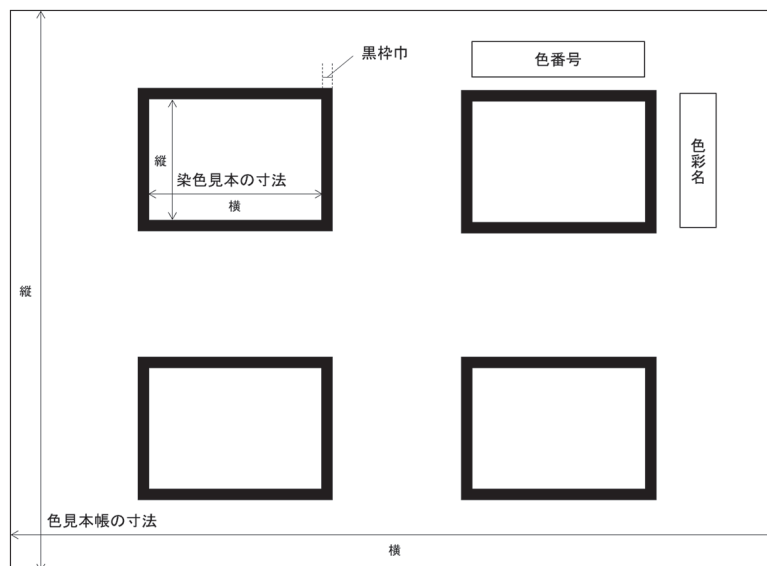


図1. 色見本帳の寸法計測位置

で押し、黒枠の右肩には縦長の渋紙を貼り色彩名を墨書していること、(オ) 染色見本は第1番から始まり第100番で終わること、である。

相違点としては、染色見本に平絹に限らず綾や綸子、あるいは木綿やモスリンなど様々な生地を用いていること、通し番号と色彩名を書いている紙が渋紙でないことなどが挙げられる。

また上記の特徴を有さない色見本帳は、見本帳本体の寸法が異なる (A『□印』、B〈名称なし〉)、F『御染色見本』、M『□印』)、染色見本裂の寸法が異なる (A、M)、染色見本裂の周りに黒枠をまわさない (A、F)、見本帳の形状が横長ではなく縦長である (M)、といった特徴が見られるほか、A、B、D、Mについては100色を超える染色見本裂が貼付されており、反対にCには染色見本裂が64色しか貼付されていない。

色見本帳の装丁に注目してみると、7冊の色見本帳の表紙に型押紙が用いられており (図3)、色見本帳E (名称なし)、H『西京染色本集全』、I (名称なし) と色見本帳G (名称なし)、K『□印』はそれぞれ同じ模様の型押紙が用いられている。また、色見本帳E、H、Iの型押紙は上原が調査した色見本帳のうち一冊にも用いられており、これらが同じ制作者によって作られた可能性が考えられる。

さらに、詳しくは後述するが、色見本帳K『□印』、L『飛印 全』、M『□印』の3冊には表紙裏ないし遊び紙の表から裏にかけて口上が墨書

されており、これらの見本帳が顧客への注文の際に貸与されたことをうかがわせる内容となっている。

なお色見本帳I (名称なし) には最終丁の裏に「維持明治十齊九歳／次丙戌／第一月擇染」と墨書があり、唯一制作年が明らかとなっている (図4)。

4. 色彩名

4-1. 色彩名の共通項

色見本帳12冊のうち、色見本帳E (名称なし) とH『西京染色本集全』は31の染色見本の番号と色彩名が共通しているのに加え、第1番「本緋」、第9番「本紅梅」、第41番「時色^{とき}」については上原の調査結果とも一致している。

また、色見本帳IとN『京染色手本』は100の染色見本のうち62の染色見本の番号と色彩名が一致している。さらにIの6丁目裏面 (図5) が第45番「黄納戸」、第46番「浮世嵐」、第48番「藍嵐」となっているのに対し、Nの11丁目裏



図3. 型押紙の表紙 (色見本帳I 〈名称なし〉)

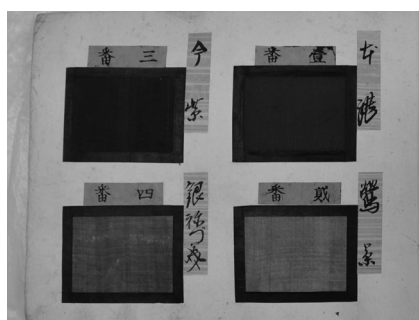


図2. 色見本帳E (名称なし) 第1丁目表面

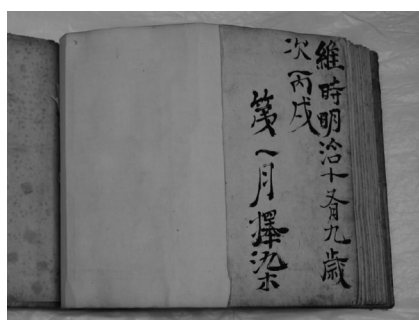


図4. 年代を示す墨書 (色見本帳I 〈名称なし〉)

面(図6)は第85番「黄納戸」、第86番「浮世鼠」、第88番「藍鼠」となっており、番号は一致しないものの染色見本の配置は一致している。同様に、Iの11丁目表面の第81番「鶴羽色」、第82番「草鼠」、第84番「御召うこん」、11丁目裏面の第87番「四条鼠」は、Nにおける6丁目表面の第41番「鶴羽色」、第42番「草鼠」、第47番「四条鼠」と配置が一致している。両者の染色見本の配置は概ね同じであり、丁の順番が入れ替わっているものの、基本的な構成は共通している。なお、一致しない染色見本には、色彩名は異なるものの染色見本の色味にほとんど差異がないものや、反対に色味も色彩名も全く異なるものが見られる。

ここに示したように、調査した色見本帳の中には、色番号と色彩名について共通項が見られるものが複数あることが判明した。約3割の色番号と色彩名が共通している色見本帳EとHは表紙の型押紙の模様も共通しており、これらの

色見本帳が同一の制作者による可能性が示唆される。色番号と色彩名が一致しない部分もあることを考えると、これら色見本帳が制作された年代が多少異なることでその当時の流行の影響を受けたか、色見本帳を実際に使用する呉服屋ないし染物業者によって色の構成が変えられたかであろう。

また、半数以上の色番号と色彩名が一致した色見本帳IとNについては、見本帳Iの墨書から明治19年(1886)頃に同じ制作元で作られた可能性が高い。しかしながら、装丁が異なることや、一部の色彩名および染色見本が異なる点も見られ、いずれか一方は後年にその当時の流行に合わせて部分的に手を加えたとも考えられる。色見本帳Iの奥付には「信州／南安曇／西蔦屋／中曽根」と描かれた店印が押され、Nには「柳馬場御池下ル町／大澤善七」と墨書があり、前者は地方で、後者は京都で使用されていたことが分かる。当時の染色が京都を中心に行われていたことを鑑みると、京都で使用された色見本帳が遅れて地方へと渡ったことも存分に考えられるが、現時点ではそれを検証する手段がないため判然としない。

4-2. 色彩名にみる各系統色の割合

各色見本帳の色彩名から系統色別の割合を算出したものを図7に示す。もっとも多いのは、色見本帳M『□印』を除いて鼠系統色であり、いずれの色見本帳でも30%前後を占めている。また、鼠、茶、藍系統色だけで64～85%を占めている。鼠、茶、藍の3系統色は江戸時代後期の「いき」の美意識に基づいて流行したとされる色系統であり、これらの色見本帳にもその傾向が強く現れている。色見本帳I(名称なし)は明治19年の墨書がある資料であり、当時の流行色を反映したものだと考えられるが、この頃にあってもなおこれら3系統色の人気が続いていたことが分かる。明治時代に制作されたと考えられている現存着物資料にも、鼠色地を持つ着物がとりわけ多く見られ(図8)、明治時

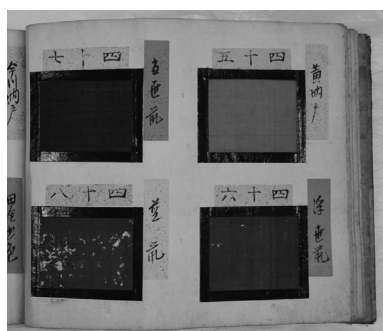


図5. 色見本帳I(名称なし) 第6丁目裏面

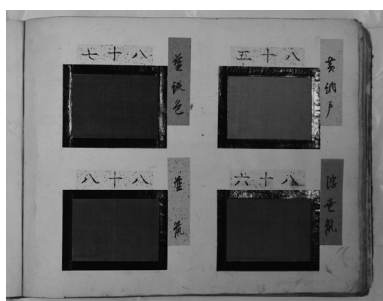


図6. 色見本帳N『京染色手本』 第11丁目裏面

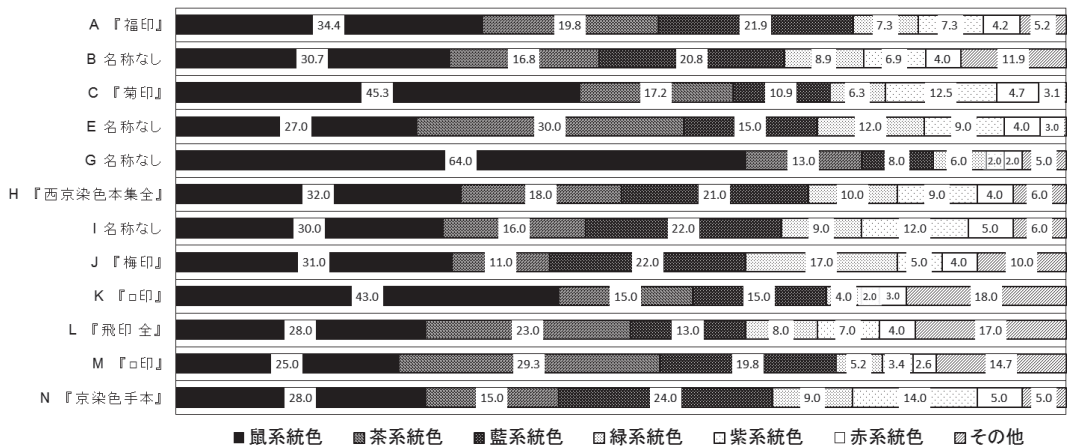


図7. 各色見本帳における系統色別の割合 (%)



図8. 鼠色地の着物
(鼠平絹地菊流水模様振袖〈個人蔵〉, 明治時代前期 19世紀)

代における鼠系統色の人気の高さを物語っている。

また、明治44年(1911)に松屋呉服店から発行された商品カタログ『今様 冬衣之巻』には「色合の変遷」と題する記事がある。同記事には明治初年から42年(1909)までの衣服の色合いの流行についての大略が記されている。それによれば、①明治初年より24、5年までは葡萄鼠、栗鼠、鶯茶、利久茶、藍鼠、深川鼠、生壁鼠、藍納戸、②明治25年より34、5年までは青竹鼠、鉄お納戸、濃紫、櫻鼠、素鼠、梅鼠、③

明治36、7年より42、3年までは濃小豆、薄葡萄、濃葡萄、紫根、橄欖樹^{オリーブ}、褪紅色、桔梗色、藍鉄、お納戸が流行したとある。①と②の間には鼠を名称に冠した色彩名が多く見られ、その人気の高さをうかがうことが出来る。その一方で、③の期間においては紫や藍系の濃色が多く、江戸時代以来の地味な色彩とは違った傾向を示し始めている。

つぎに、これらの色彩が色見本帳に見られるかどうかを確認すると表2ようになる。①の色彩名がもっとも多く見られるのは、色見本帳A『福印』、G(名称なし)、H『西京染色本集全』、I(名称なし)、N『京染色手本』の5冊であり、②の色彩名が多く見られるのは色見本帳J『梅印』およびK『□印』であった。また、③の色彩名^{オリーブ}のうち、この時代の特徴をよく表す橄欖樹といった色彩名は確認されなかった。

流行色の移り変わりについては、『今様 冬衣之巻』に、

既往数十年前に藍気の流行したる変遷を顧れば茶色は変じて藍となり次で鼠色に遷りたるは従前数回繰返されたる色合にて即ち今日の流行色と殆ど大差なし

江戸時代後期・明治時代の色見本帳に関する分析的研究

表2. 明治44年（1911）『今様 冬衣之巻』に見られる流行色と色見本帳における出現回数

名称	①明治初年より24、5年まで (1868-1891,92)		②明治25年より34、5年まで (1892-1901,02)		③明治36、7年より42、3年まで (1903,04-1909,10)	
	色彩名	出現数	色彩名	出現数	色彩名	出現数
A 『福印』	相鼠(5)、ぶどう鼠(1)、 相納戸(1)、利休茶(1)	8	鉄納戸(1)、梅鼠(1)、さく ら鼠(1)	3	桔梗色(1)、こいぶどう(1)	2
B 名称なし	利休茶(1)、相なんど(1)	2	てつ納戸(1)	1	-	0
C 『菊印』	ぶどう鼠(1)、あいねずみ (1)、うぐいす茶(1)	3	うめ鼠(1)、てつ納戸(1)、 こいむら咲(1)	3	こきぶどう(2)、薄ぶどう(1)	3
E 名称なし	鶯茶(1)、藍鼠(1)、利休茶(1)	3	櫻鼠(1)、鉄納戸(1)	2	藍鉄(1)、薄ぶどふ(2)	3
G 名称なし	藍鼠(1)、深川鼠(1)、利休 茶(1)、ぶどう鼠(1)、鶯茶 (1)、藍納戸(1)	6	鉄納戸(1)、さくら鼠(1)	2	桔梗色(1)	1
H 『西京染色本集全』	鶯茶(1)、深川鼠(1)、なま かべ鼠(1)、あいねつみ(1)、 りきう茶(1)	5	梅ねつみ(1)	1	濃ぶとふ(1)	1
I 名称なし 明治19(1886)年	鶯茶(1)、藍納戸(1)、ぶと う鼠(1)、利休茶(1)、深川 鼠(1)	5	梅鼠(1)	1	濃ぶとう(1)、藍鉄色(1)	2
J 『梅印』	相鼠(1)	1	てつなんど(1)、梅鼠(1)、 素鼠(1)	3	-	0
K 『□印』	鶯茶(1)、相鼠(1)	2	鉄納戸(2)、素鼠(1)、梅鼠(1)	4	藍鉄色(1)	1
L 『飛印 全』	利休茶(1)、鶯茶(1)	2	素鼠(1)	1	-	0
M 『□印』	利休茶(1)、藍鼠(1)、鶯茶(1)	3	鉄納戸(1)、素鼠(1)、櫻鼠(1)	3	御納戸(1)	1
N 『京染色手本』	鶯茶(1)、藍納戸(1)、ぶど う鼠(1)、深川鼠(1)、藍鼠(1)	5	鉄納戸(1)、櫻鼠(1)	2	濃ぶとう(1)、御納戸(1)、 藍鉄色(1)	3

※ () 内は出現回数を示す

とある。当時（明治44年〈1911〉頃）の流行が藍気掛かった色で、同様の流行が数十年前にあったことから、流行色は茶色、藍、鼠色の順で数回繰り返されてきており、今日の流行色と大差がないという。

以上のことから、色見本帳に掲載される色彩は、江戸時代以来の地味な色彩を好む傾向が、明治時代においても引き続いていたことを反映したものと言える。

ただ、鼠、茶、藍系統色が明治時代に流行色だと認識されていた一方で、これらの系統色が流行に左右されない定番色としての一面を持っていたことを指摘しておきたい。

先に示した明治時代に制作された鼠地の着物に見られる特徴を挙げると、模様表現に用いられている描絵や刺繍などの技法が繊細で高度であること、二枚裏の作品が少なくないことなどがある。このことから、これらの鼠色地の着物

は普段着ではなく晴れ着として用いられたと考えられる。ただし、婚礼などの格式の高い場ではなく、新年の挨拶周りといった「ハレ」の場面で着用されたようである。

明治24年（1891）12月18日の読売新聞朝刊には次のような記事がある。

春衣ハ幾年も大差なし

（前略）女に至りてハ大抵年前の古を用ゆると見えて茶、鼠の縮緬即ち従来行はれしもの、外望手なけれど（後略）

このように、中流階級の間では、晴れ着として制作する着物は毎年新しく詠えるものではなく、数年に渡って着用されるものであった。またその色は茶や鼠系統であったことが分かる。晴れ着のような着物に最新の流行色を染めてしまえば、次の年には流行遅れになってしまう恐

れがあったのだろう。明治25年(1892)7月29日の読売新聞朝刊には「図案界」と題した記事に次のように記されている。

此の色(鼠色)を應用すれば比較的失敗が少い先づ云はや無難の色であるから自づと実業者も多く使用し需用者も多く需用する譯合である

鼠色は無難な色であり、多少の色味の変化はあっても比較的失敗の少ない色として紹介されている。このことから、決して安価ではない商品を購入する消費者にとっては流行に左右されない色彩として、また生産者側にとっても安定した需要が見込める色彩として、鼠色に大きな信頼が寄せられていたことがうかがえる。

このことは、色見本帳がおもに個々に注文を受ける誂呉服を対象とする性格を持っていることから説明できる。誂呉服とは、呉服屋や染物屋が客の好みに応じてひとつひとつ調製するもので、中流階級においては通常着ではなく晴れ着を対象としたものであり、先にも述べたように数年を跨いで着用されるものが多い。つまり、数年に渡って着用することになる晴れ着には、その年の最新の流行を反映するよりもむしろ定番の色味が好まれたということである。色見本帳の色彩傾向からもそれを裏付けることが出来る。

5. 色見本帳の制作年代

調査した色見本帳は、I(名称なし)を除いて制作年代が明らかではない。毎年のように流行色が生み出されるなかで、制作年代を入れてしまっただけはその色見本帳は1年もすれば流行遅れとなってしまうため、色見本帳には意図的に年代を記入しなかったと考えられる。鼠、茶、藍系統色が6割以上を占めるのも、前章で示したように流行に左右されない色として安定した需要が見込める色を選択した結果だと言える。色見本帳『飛印 全』には奥付に「色本帳

ハ少々変色ニ御座候」とあり、この変色が経年によるものなのかは定かではないが、多少の変色があったとしても更新せずに使用していたことが分かる。

色見本帳が意図的に制作年代を明らかにしていない以上、微妙な制作年代の差を判断するのは非常に困難である。そのため、ここでは日本国内における化学染料の普及の過程を確認し、色見本帳に化学染料が使用されているかどうかを目視によって判断した上で、おおよその制作年代を推定するのみに留めたい。

化学染料が日本へ輸入されはじめた明確な年代については未だ明らかではないが、安政6年(1859)の横浜開港以来、慶應3年(1867)に神奈川奉行が幕府に報告した輸入品のなかにはすでに「染粉」を見ることができ⁵、化学染料は横浜開港後まもなく日本へと輸入されていたことが分かる。その後、本格的に輸入がはじまったのは明治3年(1870)と言われている⁶が、輸入当時は染法を熟知しないままに使用していたため、変退色や移染などの品質低下が問題となっていた。このような状況を打破するため、京都では西洋の染色技術について、その理論から実地に至る新知識を伝播すべく、染殿(明治8年<1875>)や西洋色染所(明治9年<1876>)が設置され、欧州各国で染色技術を学んだ者がその指導に当たった。しかしながら、実際に新しい染色技術が染色業界に普及するまでにはさらに幾多の歳月を要し、染色技術者養成の重要性が認識され始めたのは明治20年頃(1887)であった。また化学染料の流通については、明治20年代には全国での販売体制が整いつつあったようで、化学染料の需要拡大に伴って、ドイツ・フランス・イギリス等の各化学染料製造会社との代理店契約あるいは特約店契約が行われるようになった⁷。

明治28年(1895)大橋又太郎編『衣服と流行』の「現今流行界の傾向」という項目には、

(前略) 昔は衣服の色合も茶と紺とが原素

のやうなりしも、今日にては新奇の染料西洋より舶来し、其染色の千變萬化する眞に驚くに堪えたり、同じ紅色にても数十種の種類あり、同じ茶色にても数十種の種類あり（後略）

とあるように化学染料の色の豊富さをうかがわせ、この頃には化学染料の普及が達成されていたと考えられる⁸。

つぎに色見本帳に化学染料（表3）が使用されているかどうかを目視によって確認した。化学染料かどうかを判断するに当たっては、日本古来の天然染料による染色では見られない鮮やかさを持っていること、色見本と接地する面に多量の色移りが見られる⁹ことなどに注目した。その結果、化学染料が用いられたと考えられる染色見本が貼付された色見本帳は9冊に及んだ（色見本帳A、C、E、H、I、J、K、L、N）。なお、紺系統色においては「紺粉」（ソルブルブルー）の使用も考えられるが、目視では判断することができなかった。

制作年が明治19年（1886）であることが墨書

表3. 導入期の化学染料

符丁	染料名
黄粉	ピクリン酸
	オーラミン
	アニリン・イエロー
	ナフサル・イエロー
紅粉	マゼンタ
紅梅粉	サフラニン
橙粉	クリソージン
赤粉	コンゴーレッド
紫粉	メチルバイオレット
青粉	アルカリブルー
	ウォーターブルー
青竹粉	メチルグリーン
	マラカイトグリーン
鼠粉	ニグロシン
褐色粉	ビスマルクブラウン
紺粉	ソルブルブルー

※京都近代染織技術発達史編纂委員会：「京都近代染織技術発達史」、京都市染織試験場、p.34、(1990) および田邊勝利：「年表形式 繊維と染料の博物誌【染料篇】」、銀河株式会社、(2005) をもとに作成

から明らかとなっている色見本帳Iに注目すると、第4番「藤色」、第9番「中緋」、第32番「桃色」、第58番「本紫」、第90番「青竹」、第97番「紅梅」に化学染料が用いられていると推察される。これらには「紅粉」（マゼンタ）、「紅梅粉」（サフラニン）、「紫粉」（メチルバイオレット）、「青竹粉」（マラカイトグリーン）などが使用されたと考えられる。

また、色見本帳H『西京染色本集 全』には、第3番「いまむらさき」、第36番「こひはとば」、第66番「鶴はいろ」、第73番「本紫」にいずれも「紫粉」が用いられている。このうち、第36番「こひはとば」を除く3色において、綴じたときの接触面に色移りが認められる（図9）。色見本帳Hは保存状態が悪く湿気ないし水気を含んだ形跡もあり、一概に化学染料の品質に起因するとは言えないが、これらは初期化学染料を使用したことによる色移りだと考えられる。

色見本帳A『福印』はほとんどが低彩度であるが、第46番「青色」のみが鮮やかで、生地には羊毛モスリン（メリンス）が用いられていることから、この染色見本については明治時代以降のものだと考えられる。青色染料が何かは定かではないが、モスリンは明治時代初期から輸入されており、明治30年（1897）頃には日本国内でも生産されるようになった。

化学染料の使用が認められた色見本帳9冊について見てみると、化学染料の使用は1割に達しておらず、これらの染色見本にはいずれも初期化学染料が用いられていると考えられる。よって、これらの色見本帳は、本格的な化学染料の輸入が始まったとされる明治3年（1870）年頃以降、化学染料の本格的な普及が始まる明



図9. 第73番「本むらさき」から第71番「御召うこん」への色移り（色見本帳H『西京染色本集 全』）

治28年(1895)頃までに制作されたと推定した。これは、肉筆模様雛形本が制作されたとされる期間とも概ね一致する。

6. 色見本帳が持つ役割

6-1. 色見本帳の使用実態

表1に示したように、色見本帳の旧蔵者は奥付などの木印あるいは墨書によって明らかになる場合が多い。本論で取り上げた色見本帳のうち、木印や墨書によって旧蔵者の業態が明らかとなっているものには、「呉服太物並染物悉皆」(色見本帳A)、「ごふく染もの所」(色見本帳C)、「染詔方／悉皆所」(色見本帳L)などがある。

悉皆屋は、各工程が完全な分業となっている京都の染色において、それぞれの工程間を取り繋ぐ重要な役割を担っている。古くは模様染の元請として存在し、各種加工職人との繋がりを持つことから、模様染に限らず古着のしみ抜きや染替まで個々の客からの注文に対応するようになったとされる¹⁰。また、紺屋や茶染屋、黒染屋といったようにそれぞれ専門の染物業者が存在するなかで、専門外の染物に際して他の職人に取り次ぐと言ったかたちでも悉皆業が行われるようになった。このような形態の悉皆屋は、明治期になると京都以外の地域にも存在するようになる。なお、大正5年(1916)高橋新六著『最も新しい京染の実際』によると、悉皆屋は客の好みによって個々の染めを引き受ける「詔悉皆」と、販売を目的とする大量の染めを引き受ける「仕入悉皆」に分けられる。色見本帳L『飛印 全』には「染詔方／悉皆所」とあり、色見本帳を使用したのはおもに個別に注文を受ける詔悉皆であったと分かる。

色見本帳C『菊印』には「ごふく染もの所／京都／いづゝや」という朱木印が見られ(図10)、この「いづゝや」は呉服商と詔染を兼ねていたことが分かる。明治19年(1886)12月8日の読売新聞朝刊には、この「京都いづゝや」と同じ名の店が日本橋に出店した際の広告が掲載されている。そこには取扱商品名が列挙され

た後に次のようにある。

右之外西京染物何品にもよらず染直し等に
至るまで極々御便利専一に迅速染上げ調進可
仕候 いか程御手輕の品にていか程遠方にて
も御沙汰次第参上仕候
京都いづゝや 山鹿九郎兵衛出店

西京染とは京都の染色を指すから、東京で染物の注文を受け京都で染色して品物を納めるということである。また、遠方であっても注文のために自宅などに呼ぶことが出来たらしい。実際に染色を行う京都へ足を運ばずとも、東京の支店や訪問によっても染物の注文を可能にしたのが、まさに色見本帳であった。時代は下るが、大正15年(1926)に日本評論社より刊行された大阪朝日新聞経済部編『商賣うらおもて(続篇)』には、不正な京染悉皆屋が増加していることを伝える次のような記事¹¹があり、悉皆屋が染物見本を持って得意先をまわり、顧客の注文を取る様子がわかる。

(前略) 相當な身なりをした生白い男が、
ロクに案内もなく家の奥へ入つて来る、(中
略)『御染物の見本を持つてまゐりましたん
やけど、見て戴けまへんどすやろか』て悠々
腰を据ゑる。これは悉皆屋の外交員、見本を
出して並べると、さすがに京染は綺麗だ、女
は釣られる、見本をヒネクリ廻すうちにチャ

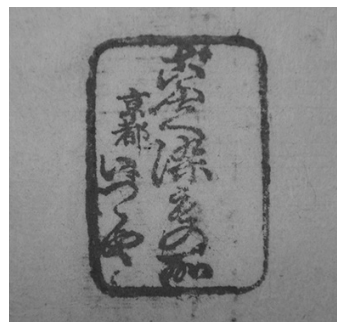


図10. 色見本帳の所蔵者を示す朱木印(色見本帳C『菊印』)

ンと注文を取られてゐる。

また、第3章で指摘したように、色見本帳K、L『飛印 全』、Mの3冊には表紙裏ないし遊び紙の表裏に口上が墨書されている。このうち、色見本帳L『飛印 全』には「口上／一 此本何方様江参り候供早速御返し下さる様□□而御願申候」と記されており、これらの色見本帳を貸し出し、用が済んだら速やかに返却するように求める内容となっている（図11）。同様の内容は他の2冊にも記されているほか、同時代に制作されたと考えられる型染見本帳などにも見られる。これらの見本帳を悉皆屋あるいは呉服屋や染物屋がサンプルとして顧客に貸与し、顧客はそこから色や模様を選んでいたことが、口上の内容から分かる。

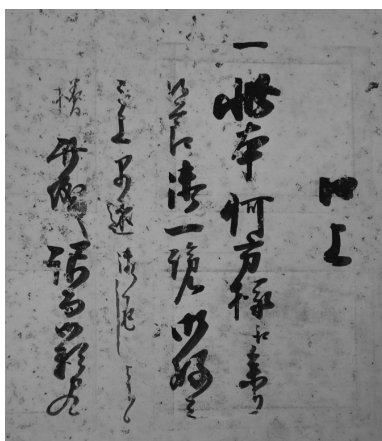


図11. 色見本帳L『飛印 全』の口上

6-2. 大黒屋彦平の色見本帳

色見本帳Hの墨書には「東京橋町二丁目／大黒屋彦平／持用」とあることから、これは明治8年（1875）に呉服商「大彦」を開業し、その後大正期まで活躍した野口彦平（彦兵衛）が所用していたものだと考えられる。

『唾玉集』¹²に掲載される彦平の談話には、蒔絵師の柴田是真とのエピソードがあるが、是真が裾模様の意匠を依頼されたのを彦平に代わり

に描くように伝えた際の様子を次のように述べている。

（前略）私（是真）は模様本を描く譯には往かないから、汝さん持って往って染めて上げて呉れ、といふ話だから、私（彦平）が津田さん所へ模様本を提げて伺ひました、¹³
（括弧内は筆者）

模様本とは肉筆模様雛形本を指していると思われる。呉服屋である彦平が模様本を発注主のところへ持参していたことがうかがえ、前項に示した色見本帳の使用法と同じであることが分かる。この場合、顧客の依頼は「黒羽二重の裾模様」を染めたいというものであり、地色がすでに決まっていたので色見本帳は必要なかったのだろうが、他の色を希望していれば色見本帳も合わせて持っていたことが想像できる。

6-3. きもの雛形本の出版と色見本帳

小袖雛形本が刊行されなくなるのと前後して、肉筆の模様雛形本が現れるようになることはすでに述べた。この肉筆模様雛形本もまた、木版色刷のきもの雛形本が刊行されるようになることによって次第に数を減らしていく。村上文芽『近代友禅史』（芸艸堂、1927、p.251）には、その当時の様相について次のように記されている。

明治二十年頃迄は図案書を雛形本と称して裾模様の一色ばかりであった、此頃中安信三郎が池田有蔵等と共に編術した『新図案』と称するものが着色図案出版の初でそれから田中幽峰の『工藝新図』が出た木版のザツとしたもので廿五年頃迄雑誌的に継続した、此時分の図案書には、友禅のみならず、織物のをも混入した（後略）

「雛形本と称して裾模様の一色ばかり」は、先の彦平が顧客先へ持参した模様本と同様の肉

筆模様雛形本を指すと思われる。先行研究¹⁴⁾によれば、きもの雛形本は明治23年(1890)年頃に刊行されはじめ、明治30年代から40年代に最も盛んになる。またこの頃には図案における配色の重要性が唱えられはじめたと指摘されており、図案の提案に地色までもが含まれるようになっていったと考えられる。肉筆模様雛形本および色見本帳はこの頃を境に数を減らしていくとされるが、要因のひとつにこのような背景があったことが推察される。

おわりに

本論では、江戸時代後期から明治時代に制作されたと考えられる色見本帳12冊について調査分析を行った。その結果、色見本帳に掲載されている色彩は、鼠、茶、藍系統色が6割から8割を占め、特徴的な流行色はほとんど出現しないことが分かった。その背景には、江戸時代後期以降の「いき」の美意識に基づくこれら3系統色の流行が、明治時代以降も続いていたことがある。加えて、これら3系統色は定番色としても需要があった。このような色見本帳を用いるのは晴れ着などを調製する呉服であったと考えられ、複数年に渡って着用することが多かった晴れ着には、流行の変化を受けにくい定番色を好み傾向があり、色見本帳にもそれが表れている。さらに、色見本帳は悉皆屋および悉皆業を兼ねる呉服屋や染物屋が客の注文を取る際に用いたものであり、流行の変化を受けにくい3系統色を多く掲載することで、見本帳を数年に渡り使いまわせるという利点がある。これはほとんどの見本帳に制作年代が書かれないことから裏付けられる。

色見本帳は肉筆の模様雛形本と併用されるが、明治30年代以降にきもの雛形本が盛んに刊行されるようになると、次第にその役割を縮小していった。これは、色を意匠のひとつとする図案を掲載するきもの雛形本が増加したことによって、地色や模様を別々に表す肉筆の模様雛形本や色見本帳の役割が次第に淘汰されていっ

たことが要因のひとつとして考えられる。

なお、今回調査が及ばなかった色彩名の記載のない色見本帳は、鮮やかな色彩が多いことから化学染料の普及が進んだ以降に制作、使用されたと考えられる。また体裁が異なる色見本帳も数冊確認しており、課題が残っている。今後はこれらの色見本帳についても、染織技術の発達や百貨店による着物の流通構造の変化などの視点を加えながら調査を継続していきたい。

謝辞

本研究を行うにあたり、長崎巖教授(家政学部教授)には終始にわたりご指導、ご助言を賜りました。記して感謝申し上げます。

- 1) 長崎巖：ボストン美術館所蔵小袖雛形本に関する調査研究—新発見の寛文6年版『御ひいなかた』を中心に—, 服飾文化学会誌, 8, 1, p.59-73 (2007)
- 2) 肉筆の模様雛形本は18世紀末から19世紀前半には制作されていたと考えられている。長崎巖：江戸時代における呉服注文の具体的プロセスに関する研究, 共立女子大学家政学部紀要, 63, p. 37-72 (2017)
- 3) 染物見本帳には友禅染や描絵のほかに刺繍が施されている見本裂もある。
- 4) 上原之節：日本の色彩名探索に役立つ新資料の紹介と、その資料についての一試論—造形的作品についての色彩の研究 I—, 東京芸術大学美術学部紀要, 4, p.27-70 (1968)
- 5) 藤本實也：「開港と生絲貿易」, 開港と生絲貿易刊行会, p.354-355 (1939)
- 6) 京都近代染織技術発達史編纂委員会：「京都近代染織技術発達史」, 京都市染織試験場, p.22-23 (1990)
- 7) 大阪絵具染料同業組合,「絵具染料商工史」, p.862-866 (1937)
- 8) ただしこの時期においてもログウッドやイ

- ンド藍に代わる化学染料は出ておらず、明治30年（1897）頃に人造藍の発明および輸入がはじまるまでは天然染料による染色が行われていた。
- 9) 日本国内への導入当時の化学染料は、それらを扱う染色業者の技術が未熟であったことや染料自体の品質が粗悪であったことから、化学染料を用いた製品に変退色や色移りなどの問題が頻繁に生じる「粗製濫造」を招いたとされる。
- 10) 岩城万里子，高寺正行：悉皆の成り立ちとその変遷，日本感性工学会論文誌，11，1，p.39-45（2012）
- 11) 見本帳を提示して契約しているのに実際には粗悪な加工であったり、注文とは異なる染であったり、そもそも品が違うという、不正な悉皆屋による問題が頻繁に生じている状況を伝える内容である。
- 12) 伊原青々園と後藤宙外の編著とし明治39年（1906）に春陽堂より刊行された。その内容は明治30年（1897）から31年（1898）にかけて『新著月刊』の「作家苦心談」に掲載したもののほか、『新著月刊』および『都新聞』などに伊原が著したものである。紅野敏郎：解説『唾玉集』の位置づけ，伊原青々園，後藤宙外編著：「唾玉集—明治諸家インタビュー集—」，平凡社，p.387-402（1995）
- 13) 伊原青々園，後藤宙外編著：「唾玉集」，春陽堂，p.210-211（1906）
- 14) 櫻木英里子：明治期きもの雛形本に関する一考察—発生と実態の背景—，服飾文化学会誌，15，1，p.1-12（2014）